フィールド（現場）からの風 ⑲⑦

宮田守男

地域全体を「山の日」の視点で考えてみませんか

山岳が地域の観光の要である大北地域が11日、初めての国民の祝日「山の日」を迎えた。晴天にも恵まれ、北アルプス連峰がはっきり姿を現わした。しかし白馬連山の玄関ＪＲ白馬駅は閑散として、多くの観光関係者の期待を打ち砕いてしまった。当日ＪＲ白馬駅から登山口の猿倉までのバス利用者は、午前9時までにわずか30人。先週の土曜日は倍の60人が乗車したとの話には耳を疑った。

総務省が10日発表した2011年の社会基本調査で、若いころから山に親しんできた団塊の世代を含む年齢層で登山・ハイキングが人気との調査結果。この世代は、60～69歳に当たる。一方で15～19歳は、男性で6・2％、女性で5％にとどまったとの厳しい調査報告。だからこそ、より多くの人が山に親しむ環境づくりのために「山の日」を制定したのだろう。

松本市で、第1回「山の日」記念全国大会が2日間の日程で開催され、初日の国際フォーラムでは「山岳ユニバーサル・ツーリズムの推進」をテーマに、誰もが楽しめる観光地づくりで論議が行われ情報発信がされた。しかし私達地元の取り組みは寂しい限りだった。観光施策の論議では、山岳観光の重要性が必ず確認され続けている。まずは、「山岳ありき」との弁者が、山を対象にした祝日は世界初との快挙をどの様に捉えていたのか不信感さえ抱いてしまう。

当日訪れた人に記念品を贈呈する対応に異論している訳ではない。どうやって、「山の日」に訪れて貰うのかの視点が欠如してはいないだろうか。登山口の駐車場や、登山客の為に用意した駐車場は満車状況。登山に向かうスタイルの現状は、近年大きく変わってきている。それらの現状分析を、つぶさに観察する姿には出会えなかった。山岳観光盛んな頃は、入り込みを注意深く見つめる関係者が必ずいたものだ。そして、その対応への真剣さが地域住民の観光への取り組みを推進したものだった。

この夏シーズンの一般客の入り込みは、前年の半分との情報。地域を訪れる一般観光客の動向をどの様に分析するのか。そこから考えられる地域観光の在り方を、地域存続の観点から論議してほしい。観光キャンペーンやイベントに参加して、地域を大いに宣伝してきた事業内容に疑問をもって、事業効果の観点から、考えてほしいと願っている。

（ＮＰＯ法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

閑散としたＪＲ白馬駅。のんびり懐かしいローカル列車の旅で大糸線を利用する家族旅行者が目立つ。